



会期：2024 年 1 月 30 日 (火)－3 月 3 日 (日)
平日：11：00－19：00 日・祝：11：00－18：00
毎週月曜休 (月曜日が祝日にあたる場合も休館)
主催：株式会社 資生堂

林田 真季

1984 年 大阪府生まれ

2007 年 関西学院大学総合政策学部卒業

2022-2023 年 ロンドン芸術大学ロンドン・カレッジ・オブ・コミュニケーション MA Photography 修了
東京都拠点

主な活動

2023 年 アルル国際写真フェスティバル LUMA Rencontres Dummy Book Award 入選

2021 年 KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭「KG+SELECT」参加



アーティスト HP：<https://www.makihayashida.com/>

林田 真季は、今日の私たちを取り巻く消費社会の現実に対して写真を用いてリサーチにもとづくプロジェクトを継続している。一見、矛盾するようでもある「記録性」と「表現性」という写真メディアの境界線を意識しつつ、消費社会の現実横たわる問題の深奥へとアプローチを試みる。

近年は、イギリス沿岸部にある過去のごみ埋立地と日本の不法投棄をリサーチ対象に選び、それぞれ〈Water Wonderland〉(2022-2023 年)、〈Beyond the Mountains〉(2019 年～)と題したプロジェクトを発展させてきた。両者に共通するテーマは、社会科学用語である「意図せざる結果」の法則を消費社会の現実のなかに見出すこと。「意図せざる結果」の法則とは、人間の意図的な行動の結果がしばしば予期せぬものであり、結果的には状況を悪化させてしまう可能性があることを表す。

プロジェクトの一部である本展《Water & Mountains》は、こうした「意図せざる結果」が垣間見られる現実の断片を拾い出し、写真メディアによるインスタレーションを構成する。それによって、鑑賞者の意識を社会の現実へと向かわせるための「考察の場 (wonder-land)」を提示しようと試みる。同時にそれは、情報過多のデジタル時代において写真のもつ力を問いかける挑戦でもある。林田にとって写真は、今日の社会において、どこにでもあるはずの日常の問題に向き合うための真摯な実践である。

Water & Mountains:

エコロジーと社会をめぐる
ワンダーランド

林田 真季

Maki Hayashida

私は 2022 年 10 月から 2023 年 12 月まで、ロンドン芸術大学の MA Photography (修士課程) で学んだ。〈Water Wonderland〉(2022-2023 年) はその約 15 ヶ月間を費やした、修士プロジェクトである。イギリス沿岸部にある過去のごみ埋立地 [historic coastal landfill] に着目し、消費社会における「意図せざる結果」の法則を考えた。このテーマに行き着いたのは、もともと日本の不法投棄をテーマとするプロジェクト〈Beyond the Mountains〉(2019 年～) に取り組んでいたからである。どちらも「廃棄物管理の『意図せざる結果』として、自然に大きな影響を与えている」という点で共通している。

自身のプロジェクトを発展させる傍ら、ロンドンで常に考えさせられたのは、現代社会において「アートとはなにか」「アーティストとはなにか」という問いだ。この問いには決まった答えがあるわけではない。答えはひとつとも限らない。この問いに対する自分の答えを持つておくことが重要である。その上で、写真というメディアを扱う私の場合、「アートとしての現代写真とはなにか」という問いに挑む。この問いにも決まった答えはなく答えがひとつでもない。しかしヨーロッパに滞在し、多様なアートに触れたことによって、私自身の答えは徐々にはっきりと見えてきた。この展覧会は、現時点でのその答えすべてを反映したものである。

アーティストとしてどのような作品を制作していくか、その確立にあたっては、何よりもまず写真の再現性 [representation] を考え直した。日本語では「真実を写す」と書く写真だが、どんな写真もそこに写っているのは決して現実そのままではない。近年私たちはデジタルで簡単に写真を「作る」ことができるようになり、写真がリアルかどうかという点で、その再現性がより身近な問題として問われるようになったと思う。しかし写真はその誕生当初から、常に作られたものであったと言える。なぜなら、撮影者としての私たちは、常に意識的あるいは無意識的なバイアスで被写体を捉えていると言えるからだ。必ず何かしらの意図をもって切り取っている。しかしながら、鑑賞者としての私たちは、特に何気なく写真を見ているとき、写真を現実の再現とみなしがちである。これらのことをふまえ、私は「イメージの被写体が作品の主題ではない」という方法でプロジェクトを展開することにした。そうすることで、私自身が考えるだけでなく、鑑賞者にも考えることが必要となると思った。

〈Water Wonderland〉では、ごみ埋立地 [historic coastal landfill] について、さまざまな写真技法とプリント技術を用いた“考古学的発掘調査”を行った。それは埋立地について、各手法や技術がもつ物質的意味合いと結びつけ、そこから生じた新しい解釈で記録していくことである。したがって、どのイメージも単なる記録ではなく、被写体や主題についてのリサーチに基づいた私の視覚的解釈となっている。またそのリサーチ過程の初期に、この物理的な廃棄物の埋め立てと、現在デジタル上で膨大な量の写真が次々と生成されただけ保存されている状況が、非常に近しいと気づいた。よって、デジタル時代における写真の物質性や複製性を問うことも意図した。その後、同様の考え方で〈Beyond the Mountains〉シリーズを見直し、この展覧会に向けて完成させたのが、フォトエッチング用のスチールプレートを作品とする《The Stacks》(2023 年) である。

ここで提示するふたつのシリーズの写真の被写体は、それぞれイギリス沿岸部の過去のごみ埋立地や日本の廃棄物処理施設であるが、作品の主題はいずれも「意図せざる結果」である。ギャラリー空間では各作品群すべてがインスタレーションとなり、不思議の国 [wonderland] の感覚と深い思考を引き起こす場 [wonder-land] が、同時に提供されることを目指した。ただし、その解釈は鑑賞者の自由である。これが私の考えるアートである。

2024 年 1 月 林田 真季

SHISEIDO GALLERY



公式HP



Instagram



X (旧Twitter)

- ①《Water Wonderland》 2022-2023 年
インクジェット・プリント(3 点組)、シングルチャンネル・ビデオ、サウンド
1,875 x 1,500 mm (各)
シリーズ〈Water Wonderland〉(2022-2023 年)より

Water Wonderland

イギリス沿岸部の過去のごみ埋立地[historic coastal landfill site]のひとつを写したゼラチン・シルバー・プリントに手彩色を施し、虚構のレイヤーを加えることで、撮影地と撮影年を曖昧にした。さまざまな埋立地の映像をプリント写真の上に投影することで、この曖昧さをさらに強めている。

また別の埋立地で録音された動画の音声には、カモなどの水鳥に混じって、カラスが鳴いている。日本人はカラスから夕日の美しさと同時にごみも連想するが、イギリス人にはそのどちらも全く結びつかない。このような無意識の感覚的な違いが、意図せざる結果を生む一因と言われている。

イギリスにおける過去のごみ埋立地[historic landfill]とは、環境許可が有効でない場所のことである。信頼できる記録がなく、埋立地のほとんどは何が埋められているのかその中身がはっきりわかっていない。そのうち 1,000 カ所以上が洪水や浸食の危険性が高い沿岸部のごみ埋立地[historic coastal landfill]と定義されており、現在その多くは自然保護区や公園となっている。そのため、拡散汚染を引き起こす可能性があり、さらに気候変動がこのリスクを高めている。

これらごみ埋立地の記録がないように、写真初期におけるその手彩色職人たちも、作品に彼らの名前が記録されることはほとんどなかった。その多くは女性だったと言われている。

本作品名は、イギリスの消費主義の象徴として、ロンドンの Winter Wonderland(ハイド・パーク内にクリスマス期間限定で設けられる巨大遊園地)に因んだ。また、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』からの引用でもある。

wonderland【名】 素晴らしい、あるいは珍しい美しさ、奇観の場所や景色
wonder【動】 疑問に思う、あれこれ考える、驚く、知りたいがる
land【名】 土地、(海などと比較した)陸地

- ②《The Stacks》 2023 年
スチールプレート 21 枚、灰を混ぜたインク、紙
420 x 297 mm (各プレート)、75 x 200 mm (各テキスト作品)
シリーズ〈Beyond the Mountains〉(2019-)より

The Stacks

東京 23 区にある全 21 の清掃工場の煙突が、エッチング用プレートに描かれている。プレート裏面には各イメージのタイトルとして、工場名と煙突の高さがエッチングされている。煙突の高さは、空港、高層ビル、高速道路、住宅などの周辺環境に応じて 41 メートルから 210 メートルまでさまざまで、景観や周辺住民への影響に配慮したデザインも多種多様である。また、清掃工場の耐用年数は 25～30 年程度のため、順次建替えが行われている。

私は当初、21 枚の煙突写真を、ごみの焼却灰を混ぜたインクで印刷しようと考えた。しかし、ごみ焼却灰は非常に危険で、許可を受けた組織や人しか扱えないことがわかった。これは言い換えれば、廃棄物管理が徹底されているということである。そのため印刷物ではなく、イン

クを載せるはずだったプレートを作品とし、焼却灰の不在を強調することにした。また、制作過程において意図せずできたプレート上の汚れや錆をそのまま残すことで、人間が果たしてすべてを完璧にコントロールできるのかを問いたいと考えた。

日本人はごみといえば焼却を連想する。環境省のデータを見ても約 8 割のごみが直接焼却されている。ただし、これは「一般廃棄物」に限った話である。かつて我が国のごみはすべて各市区町村によって処理されていた。しかし、高度経済成長に伴う廃棄物量増加から、1970 年の法改正より「一般廃棄物」と「産業廃棄物」に分類されるようになった。前者は今も各市区町村の責任であり、東京 23 区の 21 の清掃工場に象徴されるような、排出エリアにある管理の行き届いた施設で処理されている。一方、後者は排出業者の責任となり、中間業者による広域処理も認められている。このため、一時は制御不能な民間ビジネスが横行し、膨大な量の産業廃棄物が不法投棄された。

stack【名】 積み重ね、山、多量、煙突

- ③《Re-collection I 》 2023 年
インクジェット・プリント、ライトボックス
1,200 x 1,200 x 100mm
シリーズ〈Water Wonderland〉(2022-2023 年)より

- ④《Re-collection II #1-5》 2023 年
期限切れ Kodak カラー印画紙に、発色現像方式印画
20 x 16 inch (各)
シリーズ〈Water Wonderland〉(2022-2023 年)より

- ⑤《Re-collection III #5, #3, #4, #1, #2》(左から) 2023 年
インクジェット・プリント、ヴィンテージ額縁
210 x 210 mm (各)
シリーズ〈Water Wonderland〉(2022-2023 年)より

- ⑥《Re-collection IV #1-6》(左から) 2023 年
インクジェット・プリント、アクリル、生分解性ポリオレフィン
105 x 105 x 20 mm (各)
シリーズ〈Water Wonderland〉(2022-2023 年)より

- ⑦《Re-collection V #1-7》(左から) 2023 年
Polaroid Blue 600 Film をデジタル処理、インクジェット・プリント、ポリエステル
2,000 x 1,000 mm (各)
シリーズ〈Water Wonderland〉(2022-2023 年)より

Re-collection

「肉眼では見えないものが見える」写真の力を活用し、イギリス沿岸部の過去のごみ埋立地で集めたガラスびんの破片を描写した。ガラスびんの破片は、昔の廃棄物のかけらを表している。英国における近代的なごみ埋立地の開発は、1875 年の公衆衛生法がきっかけとなったと言われているが、当時の廃棄物のほとんどはガラスなどの自然素材だった。ガラスびんそのものは地球にとって有害ではないが、そこに残った有機物が化学反応を起こして有毒化する可能性がある。さらに、何年も経って廃棄物の内容が変われば、有毒な化学物質にさら

されることになる。

Polaroid Blue 600 Film は、カラーフィルムシステムと白黒現像液を混ぜ合わせることによって偶然にうまれたもので、これは本来あつてはならないプロセスである。混ざり合うはずのない化学物質の混合には、思わぬ危険性がある。これは、確実な記録のない埋立廃棄物が問題になる理由と同じで、単体では無害でも他のさまざまな廃棄物や物質と混ざること、思わぬ有害物質となり得る。

Kodak 社のカラー印画紙は、かつて消費財として大衆化された写真の象徴的存在である。市場の変化に応じ、同社は暗室用の印画紙をもう生産していない。時代が変われば、技術が変わり、そして廃棄物も変わる。インスタレーションのプリント媒体としたアクリルやポリエステルもこれを象徴している。いずれも昔は存在しなかったプラスチック素材である。

日本では 1900 年頃に本格的に流通しはじめて以来、ガラスびんは繰り返し使うものとされてきた。したがって、「埋め立ててはいけない貴重なもの」という感覚を持つ私たち日本人にとって、ガラスびんからはごみ埋立地を想起しにくい。しかしイギリスにおいては、過去大量に埋め立てられた廃棄物の代名詞的存在がガラスびんである。

recollection【名】 思い出すこと、想起、記憶
re-【接頭】 再び、繰り返し
collection【名】 何かを集める行為、収集、回収

- ⑧《LOOKOUT #1》 2023 年
壁紙にインクジェット・プリント
1,300 x 1,000 mm
シリーズ〈Water Wonderland〉(2022-2023 年)より

- ⑨《LOOKOUT #2-4》(左から) 2023 年
ゼラチン・シルバー・プリントに手彩色
10 x 8 inch (各)
シリーズ〈Water Wonderland〉(2022-2023 年)より

LOOKOUT

人間が自然に与える影響の監視者かつ最初の犠牲者として、また「ワンダーランド〔Wonderland〕」の住人として、水鳥のまなざしが写っている。イギリス沿岸部の過去のごみ埋立地には現在さまざまな水鳥が生息するが、そのうち英国王政とのつながりのある白鳥を被写体を選んだ。ポートレート写真のように見立てることによって、カメラの後ろにいる撮影者とカメラの前にいる被写体の両方の立場での「まなざし〔gaze〕」の再検証を試みた。

イギリスにいる白鳥の多くはくちばしがオレンジ色であるが、日本にいる白鳥の多くは黄色である。両国で見られる主な白鳥の種類は異なり、よって顔のつくりも微妙に異なっている。私にとって白鳥のくちばしといえば黄色のため、この写真も黄色に塗った。もし専門家がこの写真を見たら、架空のイメージだとすぐにわかるだろう。やはり、このような潜在的認識の些細なズレが、意図せざる結果をもたらす要因となり得る。

4 枚の写真はどれも同じ 1 枚のネガからプリントされている。これらの写真をセットで提示することで、たとえカメラのレンズによって捉えられたイメージであっても、決して実態を客観的にあるいは純粋に記録したものではないということを強調したいと思った。写真は常に作り上げられたものである。

lookout【名】 用心、警戒、見張り所、見込み、眺望、見晴らし

